

福島から子どもたちが！

保養所「かおりの郷」スタート



東日本大震災による東京電力福島原発事故から4年目が終わろうとしている2014年12月。保養所「かおりの郷」へ福島から多くの親子がやってきました。12月23日から29日までは、「受け入れ隊保養チーム」主催で25名の親子が、1月3日から6日は「福島の子どもたちを守る会」主催で9名の親子が参加しました。はじめての利用で、しかも大雪。寒さや狭さ、凍結が心配でしたが、トラブルもなく無事終了しました。子どもたちは到着するなり、雪山に飛びこんで汗まみれになるほど遊び近くの小金湯温泉さんのご好意で、毎日温泉で暖まることができました。

豊かな自然・農の宝庫である福島での暮らしが根本から覆されたあの3, 11。福島の子どもたちが少しでも、放射性物質から離れて希望する時にいつでもリフレッシュできるよう常設の保養所を作りたいと13年6月からはじめた保養所キャンペーンには、全国各地から多くのご支援をお寄せいただきました。本当にありがとうございます。支援を見える形にする＝支援の可視化としての保養所です。

場所は札幌市南区八剣山の麓、近くに農家、果樹園、パークゴルフ場、釣堀、温泉、パン屋さんなどもある自然豊かな所です。まだまだ改修が必要ですが約2000坪の敷地の6LDKの家を大家さんのご好意でお借りしました。名称は、守る会前代表の故・泉かおりさんの遺志を受け継ぐことをめざして「かおりの郷」とつけました。100人以上のボランティアが壁紙張替、ペンキ塗り、物置づくり、畳張替、庭整備、畑作りなどに汗を流しました。

<楽しいピザづくり> ↓



昨年夏までに、320人ほどの保養の受け入れをしてきましたが4年を経て保養のニーズは減少するのではないかと。12月1日、2日、福島現地へ行き、様々な団体や個人と面談をさせていただきました。しかしニーズは減るところかむしろ今まで保養を知らなかった人にも次第に情報が広がる一方保養受け入れ団体が減少していくという現実のなか、保養の枠が狭くなり、希望がかなわない可能性が高まっていることがわかりました。まさに「かおりの郷」の出番ではないですか。

次第に薄れる震災の記憶、汚染水は完全にコントロールされていると、福島原発事故をもう済んだことにしようという動きがあります。誰も事故の責任をとらず原発再稼働や輸出へ突き進んでいます。福島県民健康調査の結果では福島県の子どものうち、114人が甲状腺ガン、またはその疑いと報告されています。県は原発事故との因果関係はないとしています。保護者の不安は尽きません。不安を煽るから検査結果は紙切れ一枚、という情報を公開しない県の姿勢が不安のもとであると思います。その健康調査すら中止や縮小の声があがっていますが、もっと公的責任で保養に取り組む、エコー検査のみならず、血液検査、尿検査、心電図など総合的な透明性の高い検査が求められます。保養に参加した方がマスコミの取材にこうおっしゃいました「福島の人にはあまり怒らないっていうけど私は怒りたい。故郷が汚された怒り、原発事故の前と後の生活が全く変わってしまった怒り、子どもたちの環境が変わってしまった怒り」と。静かだけれど強い憤りが伝わってきます。そして「保養はありがたい、部屋もボランティアも暖かい」と言ってくれました。その言葉を心にきざみ、「福島の子どもたちを守る会・北海道」は5年目の3, 11を迎え、支援する人、される人の関係から文字どおり「共に生きる」関係の構築へ新たなステージへ決意を新たにしています。これからもどうぞよろしくお願い申し上げます。

NPO法人「福島の子どもたちを守る会・北海道」

理事長 山口たか